

## 月と生きていく国

聖ドミニコ学園中学校 二年 齋藤 清子

初めてシンガポールを訪れた夜のことを、今もよく覚えている。空港から街へ向かうタクシーの窓の外に、白く輝く月がかかっていた。蒸し暑い空気で汗ばんだ肌を、白い月光が照らす——まるで街や人々を静かに見守るようだった。この月光のおかげなのか、私は初めて踏みしめるこの国の夜道を歩きながら不思議と安心していった。月が見守ってくれているのなら、この異国でも大丈夫——そんな確信めいたものだったのだろう。

シンガポールの人々は、太陽のように激しいわけではない。けれども、その代わりに月のような穏やかさがあった。ホテルのフロントで出会った青年は、私が日本人だと分かるやいなや知っている日本語を使って話しかけてくれた。タクシーの運転手も、語りかけるように自分の故郷の話をしてくれた。その静かな優しさに、私はまた月光を思い出していた。

月は、人々の中にだけでなく、国旗にも存在していた。その意味を、私はこの国にいううちに少しずつ感じていった。小さな国であるにもかかわらず、その歩みは月が満ちていくように確かなものだった。夜市で出会った中華系の店主、マレー系の子どもたち、インド系のホテルスタッフ——それぞれ違う背景を持ちながら互いに尊重し合う姿は、形を変えながらも変わらず空にある月そのもののようだった。国籍も言葉も、歴史の背景も異なる人々が集まるこの国で、月は誰にとっても同じ姿を見せている。その公平さが、この国の空気に似ていると感じた。優しく、見る者の心を落ちつかせる。これは、もう月そのものの「よう」ではなく、月「そのもの」だった。

月は、派手に輝くことはない。けれども夜の闇を柔らかく照らし、どこか安心を与えてくれる。シンガポールの人々も同じだ。強く押し出すのではなく静かに支え、確かな道を築いてきた。新月のように控えめに始まり、弓なりに光を増していく。そのたくましさを、街の整然とした景色や、穏やかな人々の声の中に感じていた。

旅の最後の夜、私はホテルの窓から空を見上げた。あの日と同じ月が、静かに街を照らしていた。満ちても欠けても変わらずそこにある月のように、この国もまた、姿

を変えながら未来へ進んでいくのだろう。国旗に描かれた白い月は、ただの模様ではない。それはこの国の人々そのもの、努力と希望の象徴であり、静かに照らし続ける光なのだ、胸の奥で確かに感じていた。月は何も語らない。それでも、夜空の高みから静かにこの世界を見守り続けている。その光に包まれながら、私は旅の終わりを静かに受け止めていた。

窓の外月は、南国の夜気をすくい、遠く離れた私の故郷——日本へも届いていくのかもしれない。同じ月を見上げる人がどこかにいると思うと、私は不思議と温かい気持ちになった。旅の記憶とともに、そっと目を閉じた。心の奥に、月の静かな輝きがいっまでも残り、またどこかの夜に思い出の扉をそっと開けてくれるような気がした。

今日この日も、シンガポールは月と生きている。